

# 部活動の生徒とともに

大野高校 卓球部顧問

山腰 甚一

平成二十二年六月五日、大野高校卓球部にとって記念すべき一日となりました。福井県高校総体で男子団体初優勝を収めたのです。私にとっても、大野高校にとっても大きな一日となりました。

私が大野高校に赴任したのは、一三年前です。突然の異動で驚きましたが、母校で勤務することになりました。

大野高校は、人口約四万人の大野市を主体に勝山市や美山地区から生徒が通っている普通科六クラスの進学校です。授業は七時間授業で、課外授業が長期休業中に行われています。

私が赴任した当時から地元の中学校に

は卓球部がありました。が、県レベルではあまり活躍した選手がおらず、新入部員に対しても基本の基本から教えるという状況でした。二年間練習を積み重ねて、三年生が最後の大会となる高校総体に臨むと、この前まで中学生だった新一年生という勝負をして負けるという状態が五年くらい続きました。このままでは勝てない。かといって無理をすると大野高校の決められた練習時間を超えてしまう。地元の選手を伸ばすにはどうしたらいいのか。

そこで考えたのが、小中学生の活動を指導するという事です。幸いなことに



団体戦メンバー

大野クラブジュニアというチームが十年ほど前に発足し、週三回（七時〜九時）練習をすることになりました。自分の娘二人が小学校に入り、大野クラブジュニアで練習をするようになったこともあって、私も練習をコーチするようになりました。それ以降は大野高校で部活動を七時まで指導し、それからジュニアの練習に参加するという生活を毎週二回続けています。

最近になって、やっと小中学校の時に指導した選手が大野高校に入ってくるようになってきました。大野高校の体育館でラケットを握ったばかりの頃から指導してきた子供達をまた指導するというのは何とも言えないものです。ただし、良いことばかりではありません。問題の一つはクラブチームの経験者と一般の生徒との大きな差が出てきたことです。「強い選手とそうでない選手とをどう一つのチームとしてまとめるか」は指導者にとって永遠の課題だと思います。特に卓球は他の競技と比べて個人競技と知られていますが、私はいかに卓球を団体戦という競技に持っていくかに苦心しています。もう一つの問題は、小中学生で県内のみならず全国でも活躍する選手ができたことです。そうすると、進学校である本校で、有望な選手を指導できる環境を期待することができなくなってきました。そんな時に思ったのは、「種をまかねば生えてこない」ということでした。実力のある選手が出てきたからこそ、いろんな問題が出てきたのであって喜ばなければならぬなあと思うのです。

最近学年  
に一人ずつ  
くらい核と  
なる選手が  
入学してく  
るようになって  
き、団体戦  
でベスト4  
以上を狙う  
ことができ  
るようになって  
きました  
た。かなり  
試合経験も積んでおり、私よりも技術や知識が越えていている選手も入ってきました。それで練習メニューやトレーニング指導をするという形をとるようにしました。そうすると校務で体育館に指導に行くことができないう日も充実した練習ができるようになったり、生徒の自主性が伸びて私が見ていないときでも精力的に練習に取り組むようになったように思います。そんな姿を見て、「一体今まで自分がやってきた指導は何だったんだろう」



団体ダブルス

とと思いました。「いかに自分が生徒を指導するか」ではなく、「いかに生徒が気持ちよく練習に取り組めるようにするか」ということに自分の意識が変わっていきました。  
ところが、高校総体前の三月から四月にアクシデントが続きました。主力選手の足の肉離れ、肩の骨折、普通に歩くことが難しいほどの腰痛というけがが続き、レベルアップどころか満足な練習ができないという状況でした。その時私が感じたのは、「生徒達が焦っている」「けがをするくらい意気込みすぎている」ということでした。生徒達が優勝したい気持ちは痛いほど伝わってきましたが、私の仕事は「気楽にリラククスして生徒の力が十分に発揮できる」ようにすることだと思いました。五月末には新型インフルエンザが流行したために遠征をする事ができませんでした。自分でどうしようもないことは悩まないようにして、自分が何とかできることに対して専念し、精一杯努力するというようにしました。そして迎えた高校総体では、感激の涙を生徒とともに流すことができました。



T V ちかっぺに出演

振り返ってみますと、自分が高校時代から目標にしていた福井県で団体優勝を今年成し遂げることができました。当たり前のことですが、選手や保護者、地域の指導者や卓球協会などたくさんの方々に変お世話になりました。また、家族にも日頃お世話になりました。これからできることを生徒とともに相談しながら部活動に取り組んでいきたいと思えます。



## 『高校生が聞き取った 若狭の戦中・戦後』 刊行までの取り組み

### 戦中・戦後体験聞き取り調査委員会



#### 調査の目的と概要について

第二次世界大戦の終戦から六〇年目を迎えた二〇〇五（平成一七）年の夏は、冷夏といわれる今夏に比べかなり暑い日が続いたように記憶しています。そのようなか、福井県立若狭高等学校・若狭東高等学校・小浜水産高等学校（若狭三校とも総称）の社会科教員と当時第一学年に在籍した生徒たちが中心となり、若狭地方（高浜町・美浜町）を主な対象地域の取り組みが実施されました。その目的は以下の通りです。

- ① これから二一世紀を生き抜いていく若い世代に、戦争というものの悲惨さや残酷などを、この聞き取り調査を通じて実感してもらうため。
- ② 戦争体験者が高齢化する中、彼らが体験した戦中・戦後直後の状況を風化させることなくできうる限り正確に記録し、それを「史料」として保存し後世に残すため。
- ③ 上記②の史料をもとに、戦中・戦後直後の状況をできる限り史料に忠実に復元し、文章化して、刊本として発刊し利用に供するため。
- ④ 上記①～③の取り組みを通して、戦争